

へ　ラ　ス　ゴ　イ
(下)

吉　原　好　人

第三章　ベラスゴイとベラスゴス

第一項　アルカディアアのベラスゴイ

系譜は古代の縮圖なりといはれる位重要なものであるが、系譜のみによつて古代を研究することは困難である。そは系譜そのものが果して真なるものか、或は後世人の附加になるものかを決定することに於いて正確を期しがたいからである。然し今、ベラスゴイの名祖ベラスゴス(Pelasgos)に關する系譜を求めて、ベラスゴイの住地を想定しようと思ふ。

ヘシオドスは、ベラスゴスを最古の人と歌ひ、しかも人類の祖であり、そしてアルカディアアを彼の故郷とする。^①即ちベラスゴイがペロポネソス半島の中部アルカディアア高地に居住することに想像される。然しこれに對し、こは

後世人がベラスゴイの名祖ベラスゴスをアルカディアアの系圖に附加したにすぎずベラスゴイのアルカデイ存在を認めない説もある。その理由として次の如く説く。元來アルカディアア最古の王はリカオン(Lycos)で、彼の五十人の子供は夫々アルカディアアの地名、山名等と關係があるが、この子供の中長男ニクテイモスが父について當地を支配した傳へがある。そしてアルカディアアの人々は、自らを最古の人の子孫と考へ彼等の祖は「月より前に」生れたと信じて居る。然し一方詩人アシウス(Asius)等は、ベラスゴスを最古の人、人類の祖とする。この考へが有力で、アルカディアアの系圖をより古くする爲りリカオンをベラスゴスの子にすべき要求が起り、かくてベラスゴスがアルカディアアの系譜に混入せられたのである。^②然しアルカ

ディア人の祖は月より古しと誇つて居る彼等が系譜を古くする爲、敢て外國のペラスゴスをリカオンの父として採り入れる必要はあるまい。やはりこの傳説は、ペラスゴイミアルカディア人との間に關係あることを示すものではあるまいか。尙、海の娘メリボイア(Melibia)はアポロドール(Apollodor)によれば、ペラスゴスの妻で、ヘシオドスによれば、リカオンの妻であるが、アルカディアの如き山地で海の娘が王妃であるのはおかしい。しかもメリボイアは明らかにテッサリアの東海岸の主邑地ミ同名である。故にアルカディアの原始人はテッサリアのペラスゴイが南遷したものでか、或は少くも南下してこの地の先住民と融合したものとみることには出来ないであらうか。ヘロドトスは小亞のイオニア人にアルカディアのペラスゴイの分子が加はつて居ることを述ぶ。彼はアルカディアにペラスゴイの存在したことを認めて居るのである。

註① Strabo; V. 24

② Ed. Meyer; F. Zitt. A.G.S. 65. 66.

③ Herodotus; I. 146.

第二項 アルゴスのペラスゴイ

次にペラスゴスは、ペロポネソスのアルゴスの系譜にも見得る。

アキュシラオス(Acusilaos)はペラスゴスを地から出生したとして、且つアルゴスの系圖に加ふ。

① エスキロス(Aeschylus)は、彼の「保護嘆願」に於てペラスゴスをペロポネソス半島からマケドニヤの東部に及ぶ全ギリシヤを支配したアルゴスの王として舞臺に活躍させ、彼の時代埃及人ダナオス(Danaos)及び彼の子孫がアルゴスに上陸する。そしてダナオスの四十八人の娘を競馬の賞として結婚せしめ所謂ダナイの民族が生ず。ヘロドトスによれば、このダナオスの娘等はテスマボリア(Thesphoria)といふ密儀をこの地のペラスゴイの婦人に教へたと言ひ、ヘラニコスは、ダナオス侵入の際、ペラスゴイはペラスゴスの下に、北テッサリアの方へ遁れたとし、同じくスタピロス(Staphylos)は、ペラスゴイがアルゴスの出で、テッサリアに移つたことを述ぶ。

遺跡としては、アテナイ、アクロポリスのペラスゴコンに同様な城壘がアルゴスにも残存する。^⑤かくの如くペラスゴイがアルゴスにも存在したと思はれる節がみゆるが、此等の説の所以は、テッサリアのペラスギコン・アルゴスミペロポネソスのアルゴスミの混同から生じた誤りであつて、實際アルゴスにペラスゴイは存在しないこと述べる者もあるが、ペラスゴイがテッサリアに遷がれたといふことは或はペラスギコン・アルゴスミアルゴスミの混同から生じたとしても、全然アルゴスにペラスゴイの存在することを否定し得るかどうか疑はしい。現に *Dury, Scipi, Ridgeway* 等は存在説を採る。故に後のアカイア人、ドウリア人その他の希臘民族が北方から移動したところから想像するに、ペラスゴイも亦北方から南下し、その道程に於て、或る地方に幾十幾百年に定住し、或はその地方の人民と融和混合した名残として、ペラスゴスの名稱がアルカディア、アルゴス後述のテッサリア、ドドナ等に見出されるのではあるまいか。

註① Pl. II.

- ② Il. 171.
- ③ *Diogenes* I. 17.
- ④ *Schol. Apollonius Rhodus* I. 58.
- ⑤ *Smith; Classical Dictionary*
- ⑥ *How and Wills*. 443p.

第三項 テッサリアのペラスゴイ

中部ギリシヤ、テッサリアを貫く大河ペネオス(*Peneos*)の流域テンペ(*Tempe*)の峡谷の西南方に廣大なる平野がある。この平野を稱してペラスギオテイスといひ、ホメロス時代には、ペラスギコン、アルゴスミ言ふ。^①

又ヘルメスがアポロの牛を盗んで、テッサリアの東マゲネシアからその西のペラスギアを経て、南のアカイアピテイオテイス(*Achaia Phthiotis*)へ向つた神話がある。^②

又テッサリアの東岸バガセウス灣は別名をペラスギコス灣と稱す。^③

以上の *Pelasgians, Pelasgion Argos, Pelasgia, Pelasgi* 等によつて、ペラスゴイがテッサリアに關係あることを思考するのであるが、猶名祖ペラスゴスについて考へてみなければならぬ。

前項に於て、ヘラニコス及スタピロスの説により、大體テツサリアのベラスゴイを想像し得たが、此外二三の文獻をあけてみる。

II. II. 68r の解説によると、テツサリアの名祖テスサロス (Thesalos) の子ハイモンの妻は、アルゴスのラリサで、この二人の間の子がベラスゴス (Phlegos) ピテイオス (Phthios) アカイオス (Achaïos) の三人で、後ベラスゴスの子孫はピテイオスの子孫ヘレン (後のヘレネス即ギリシヤ人の名祖) からテツサリアを追はれて居る。

次に、ベラスゴスをゼウス (Zeus) シニオベ (Niohe) ミの間の子とし、それから六時代たつてボセイドンミラリサとの間に、ベラスゴス二世、ピテイオス、アカイオスが生れ、^④そしてこのベラスゴス二世及び彼の兄弟は、ベロポネソスからテツサリアに移住し、それから六代目に Deutalion (ヘレンの父) の下に、Aetolem, Iedegem から追放された記事もある。^⑤

かくてテツサリアに於けるベラスゴイに關する諸説を述べたのであるが、上述のベラスギコン、アルゴス及び

ベラスゴイ(下) (吉原)

その附近には、ヘレネス人アカイア人、ミルミドン人等が住し、ベラスゴイが生存したさいふ記事がないところから、^⑥ベラスゴイのテツサリア居住を認めない人もある。^⑦

然しホメロスにベラスギコン、アルゴス及びその附近にベラスゴイ居住の記事がなく、却つてヘレネスその他が占有してゐるにしても吾々はヘレネス侵入以前に、ベラスゴイが生存してゐたことを認めるのである。ヒエロニモス (Hieronymus) は明らかにテツサリアミアグネシヤとの間の平原に、ベラスゴイの存在を認め、この平原をベラスギアの平原と稱して居る。

スミスによればアルゴスさいふのは、テツサリア人の言葉で平野を意味するさいふ。若しさうであれば、ヒエロニモスは、ベラスギコン・アルゴスにベラスゴイが居住することを確言して居るのである。一民族が外來者侵略の爲或る地方から他へ移動する場合、先住者が一人残らず移つて、もとの地に少しの痕跡を残さないさいふことはあり得ないであらう。ヘレネス侵入の際ベラスゴイの大部は他へのがれたであらう。然し一部は残存して、

第十六卷 第一號 一〇九

へレネスを混和したであらう。このことをテッサリアのペラスゴイ的地名から、又名祖ペラスゴスから推定するのである。

註① 前出 II. II 681

② Homeric Hymn, 17.

③ Everyman's Library; An Atlas of Ancient & Classical Geography.

④ Diony. Hal. I. 11. 17.

⑤ Hesiod, fr. 136. Strabo. VII. 72.

この外 Argos 王 Akrisios はペラスゴスの曾孫テッサリア王 Tentemides の所にのがれたが神託の通り子 Pelasgos に殺される所謂 Akrisios 傳説もある。

⑥ II II. 681 ff.

⑦ How & Wells. 443p.

以上テッサリアのペラスゴイを探究したのであるが、希臘の西北エピルス山中ドドナ (Dodona) もペラスゴイと關係がある様である。ペラスゴイは Deukalion からテッサリアを追はれて、ドドナに住地を求め、此處から彼等は更にイタリアに向つたが、^①アキレウスがドドナのゼウスへの有名な祈願に「ドドナ王、ペラスギアの王な

るゼウスよ」^②といふ句がある。これらからいへばドドナは正しくペラスゴイの住所の様である。

然し II. XVI. 224 の「ドドナの神殿の附近はセリ族 (Selli) 住し」^③、II II. 750 によれば「エニエネス (Aenienes) 住し、又ヘロドトスがドドナの神託の起原を述べた所に、今はペラス、以前はペラスギアと稱せられた地のテスプロティア族 (Thesprotia) が埃及のテエベの神に仕へた女を買ひ、その女が櫛の下でゼウスの神殿を建てた」^④、故にドドナの住民はテスプロティア族の様でもあるが、これはホメロス及びそれからすつと下つてヘロドトス時代の住民のことで、セリ族等のドドナ居住以前を考へてみなければならぬ。

エプホロスは、ペラスゴイの力がこゝまで擴がつたといふ意味に於て、エピロス系は多くペラスゴイであると言ひ、^⑤他方ホメロスヘシオドス引用のドドナは Pelasgische Grundung であるを明らかに述べた者もある位である。^⑥

かくてペラスゴイの住地であつたを考へ得らるべき地

方、或はある時代實在せる地方にして、ドバナ、テツサリア、アツチカ、アルカディア、アルゴス、レムノス、クレテ、その他小亞沿岸等を擧げたのであるが、これらのベラスゴイの最古の故郷が何處にあるか、又如何なる経路をこつて希臘に這入つたかについては、明らかでない。最古の起原地を簡單に東洋とし、黒海からドナウ方面に現はれ、一部は小亞の海岸を南下したとし、大部はトリアキアからマケドニアを経て、^①テツサリアに入りヘルネスに追はれて、イタリア、アツチカ、ペロポネソス半島、多島海諸島、更に小亞に移動したとするか、或は小亞細亞から西方に次第に移つたとするか決定しがたい。

註① Dionys, Hal. I. 18. Plataichos (Platynus) et Phaeonon が *ペラシカ* 共に *ヘレネス* に來たを述べる。

② II. XVI. 238. Strabo, VII. 7.10. *ヘシオポリス* の断片十八にも *ペラ* の *ペラシカ* のことを述ぶ。

③ このセリミイフのは民族でなく脚を洗はず地上に寝る祭司であるともいはれる。

④ II. 56.

⑤ Strabo, V. 24.

⑥ *ク* VII. 7.10

ペラシカ(下) (吉原)

⑤ マイヤーもペラシカの名が内部マケドニア居住の Pelagonen と關係あることは非常に可能性あると述ぶ。
G. des Aethiens, 770s. Baloch も同意見である。

第四章 ペラシカ論史

ペラシカ並びにペラシカに關して、古代人が如何に論じたかを出来るだけ簡單に叙述して、最後に結論を把握しなければならぬ。ヘシオポリスは、ドドナをペラシカの住地 (Pelagon hedraion) とし、ペラシカをアルカディアの英雄リカオンの父とする。

ペレキデス (Pherocides) もペラシカをアルカディア

の系圖に入れる。①

アシウスは、ペラシカを地上人類の最初の人として論ず。

ヘカタイオスは、ペラシカをテツサリア王とし、又アテナイの古壘ペラルギコンを説明して、ペラシカを三轉稱し、ペラシカの築造として。即ちペラシカのアテナイ居住を認め、そして彼等を此地からレムノス、インブロスへ移した。又彼はペラシカは、ヘルネスで

なくバルバロイであつて、ドーリア人侵入前ペロポネッスの大部分を開いたミする。

アキュシラオスは、ベラスゴスをアルゴスの系圖に挿入して、ゼウスミニオベシの間の子ミする。

ヘラニコスの説は、ベラスゴイ史に於て、後の規準たるべきものであつた。彼はベラスゴイの起原をペロポネッスにする。然しヘシオドスその他のアルカディア説もこゝこなり、アキュシラオスと同じくアルゴスにもつてくる。そして埃及人ダナオスの侵入により、ベラスゴイはベラスゴス二世の下にテッサリアに移つた。然しデウカリオン及びその子ヘレンによつて、アテナイ、クレテ、小亞等に分散した。然し大部分はイタリアの方へ移つた。「ナナス王の下にベラスゴイはヘレネスに追はれ、イオニア灣のスピネ河に船をすて内地のクロトナ市 (Krotona) を奪取した。後此地を立つて、彼等は今テイルヘニア (Tyrrhonia 或は Etruria) にいつて居る地に植民した。」⁽⁴⁾ この物語はヘロドトスの記事と無關係でない。「テイルヘニア人の上部クロトナ市に住したベラスゴイは、以

前ドーリア人の隣人であり其當時は、今テッサリオテイス (Thessaliois) に稱せられて居る地に居住した。」⁽⁴⁾ 彼はテイルヘニア人即ちエトルリア人ミベラスゴイミを結合した。彼によつてベラスゴイはイタリアに這入つた。⁽⁵⁾

ヘロドトスは、實在のベラスゴイをヘレスポント南岸のブラキエ、スキラク (Plake, Scylace) 等に見出す。そして彼によれば、小亞のアイオリア人或はイオニア人も (VII. 94, 95) アルカディア人も (I. 146) アルゴス人も (II. 171) アテナイ人も (I. 56, 57. VIII. 44) ドドナの住民も (II. 32, 36) 何れもベラスゴイである。そして今ヘラス (Hellas) といはれて居る地は、以前はベラスギア (Pelagias) を稱せられた。⁽⁶⁾ 然しベラスゴイにより未開の状態にある希臘人をさしたのであるこゝは明らかである。⁽⁷⁾

エスキロスは、ベラスゴスを全希臘王國の支配者ミする。彼の劇詩「プロメテウス」879に於ては、ベラスゴイの地は單にアルゴスを意味する。

ソポクレスは、又アルゴス説にかへり、そして彼はテ

イルヘニア人ミペラスゴイを同一視する。

前四世紀に於て希臘史を體系つけたエブホロスは、大體ヘラニコスの意見に賛成して居るがペラスゴイの故郷をアルカディアとす。尙ペロポネソス全體をペラスギアと稱した。そして古代作家が彼等について言及した希臘のあらゆる地 *Dadona*, *Thessalia*, *Boeotia*, *Attika*, *Crete*, *Joas* に及ぶ地方まで征服し植民した好戰的民族とした。然し不幸にして彼がペラスゴイを希臘民族として、或はバルバロイとして取扱つたかについては知り得ない。

ピロコロス(*Philochoros*)は、ペラスゴイをペラルゴス(*Palargos*) 即鵜と解し、ペラスゴイの再三の住地變更を鳥の季節的移住に類することからつけられた名稱とする。

ツキヂデスは、ヘラニコスと同様にデウカリオンの子エレン出現以前、希臘の廣大なる地域に分布した原始住民とする。^⑧

これによつてペラスゴイ史は、ほゞ終了する。一方へ

ペラスゴイ(下) (吉原)

ロドトスミヘラニコス、他方エスキロスミツキヂデスミの間に新舊あらゆる學者が、或は賛成し或は反對し或は混淆し或は言語・宗教人類學等各方面から新材料を發見せんししながら、未だ逡巡何れも決定しかねて居る。ペラスゴイが希臘民族であるか、非希臘民族であるかといふことは、問題になる有様である。Edward Meyer は1893年發行の「古代史研究」に於ては、ペラスゴイを希臘民族とし、1906年の「古代史」に於ては、訂正して前希臘民族とする。

更に、ペラスゴイが如何なる人種に屬するかといふことになれば、諸説は益々紛糾する。キーペルト(*Kleperl*)は、彼等をセミタイクとする代表者であり、テムムゼル(*Thumser*)はイリリアンとする。^⑨ G. Sergi は、新石紀時代埃及から來た地中海人種、即ち *Eur-African race* の一派とする。同じく *Ridgeway* は、ペラスゴイをミクネ文化の創造者とする。ミクネの遺跡のある所は、傳説上ペラスゴイが存在することを目にし、地中海の原始民をかたちつくつた身長短く、皮膚黒き *dolichocephalic race*

であるとし、少數の廣頭或は擴頭を有するは、小亞から入つた海外の要素が包含されるからである。^①

彼等の言ふが如くベラスゴイは埃及人に小亞の要素を加へたものとすれば希臘内地に於けるベラスゴイは多島海から侵入したことになる。ベラスゴイ南方到來説である。然し地中海人種を形成する一つの要素として、ベラスゴイが加はつて居ることは考へ得られるが、ミケネの遺跡にベラスゴイ傳説とは必ずしも一致せずミケネ人或はミノア人その者がベラスゴイであるとは信じがたい。

兎に角、ベラスゴイは廣大な範圍にわたつた前希臘民族は言へるが、その名稱の由來についても、彼等の自稱であるか、或は他の民族の命名であるのか、或は幾多の Stämme が存在し、その中の特に有力なベラスゴイが總てを代表する様になつたか、或は廣い地域の民族を希臘民の先住民として、嚴密の意味では、ベラスゴイに何等の關係もないものをも、總て“die Aellen”にふ意味で用ひたか、或は單に極めて古い時代・時期 immemorial age or period を指すものか、何れをも斷定しがたむ。Hertzberg

はたゞこの位のことは言へるとして、既に歴史時代になつて希臘史の最古の時代に於て、Jamnon (ヘロボネソスの最南端) から東マケドニアに渡る大版圖及び附近の島嶼、特にエウボヘアや今のイオニア諸島地方に、大小幾多の種族にわかれて擴充し、しかも本質的には同様な民族團體が定住した。これを簡單に原始希臘人として表はしてよく、この歴史時代に於ける古代民族をベラスゴイと稱し得る。^②

要するにベラスゴイに關する研究は、史料となるべきものが殆んど傳説である。しかもずつと遅れて記録された傳説で、その傳説自身が暗示する事實の真相を看取しなければならぬ困難の爲、遂にかくの如き錯綜紛糾を來たしたので、未だ定説がないのである。

註① Fr. 35.

② Vgl. Herodotos II. 171

③ Hellenikos fr. 1.

④ I. 57.

テイルヘニア人の上部に住むベラスゴイの住地はマケドニアであるといふ説がある、然し N. Niebuhr, Me

bet に従つて、イタリヤのそれとする。

⑤ プルタルコスは「ロムルス」にペラスゴイがローマの基礎をつくつたことを述ぶ。

⑥ サモトラケ、アンタンドロスの住民は今名は異なるがペラスゴイであるとする。

⑦ 特にこの考の著しうのは VIII. 44
I. 13.

イタドニアのフリテ半島方面の住民はかつてレムノス、アテナイに住んだテイルヘニア人から出たペラスゴイをみる。 IV. 109.

「ペラルギロンはそのまゝにしておけ、其地に住む日禰あるべし」なるムビタイアの神託をあげて、アテナイのペラルギロンは人民の居住が禁ぜられてゐたが止むを得ず住んだ時神託の實現したことを述ぶ。 II. 17.

⑧ Lehrs, *der alt georg.*, 241.

⑨ Hermann, *Lehrb. der griech. Antiq.* I. 41

⑩ Eng. trans *The Mediterranean Race.*

⑪ W. Oncken, *Allgemeine Geschichte* I. 5. 1. S. 12.

(五十二五)